神社と震災
～寒川神社の被害と復興～

寒川神社方徳資料館 学芸員 佐原 慧

はじめに

令和5年は大正12年9月1日の関東大震災から数えて100年の節目にあたる。震源地の相模湾から程近い当神社でも、大震災と翌年の余震により御社殿以下境内建造物の殆どが倒壊または傾斜し、神社が鎮座する県央・湘南地域でも多くの方々が被災した。当神社では、震災の記憶を風化させず後世に伝えていくことを目的とし、企画展「神社と震災」を開催した。

1．寒川村の震災被害

震災前後の寒川村役場文書は存在していない為、正確な数字を求めることはできないが、他の震災の記録からその概要を知ることはできる。寒川村倉見に住む北村勝乗の手日記には「正午頃昼休みをしていると、大地震でも早まるで天地せんばかり（中略）町内ハ全滅の有様、門沢橋の方を見ても中倉見の方を見ても家ハ見へない。浦の田ハ稲がうまりて、やつと首をだしている。地面ハえみさけて、二尺や三尺の口を開けている所ハ沢山ある。東京、横浜の方面ハ火事と見へて、夕方から真一面ニ赤く見える」と記されており、「天地せん」という表現からもその揺れの大きさを窺い知ることができる。周辺の被害状況は「家ハ見へない。浦の田ハ稲がうまりて、やつと首をだしている。地面ハえみさけて」とあるように、家屋は全滅、所々で液状化現象や地割れが発生していたことが分かる。また夕方になると、東京、横浜の方面は、「真一面ニ赤く」見えたという。東京・横浜から20～30㎞離れた寒川村からも都心部の震災火災の様子を知ることができた。

『神奈川県震災誌』によると、住宅及び住宅以外の建物の倒壊・半壊の割合が高く、焼失した住宅や建物がほとんど無かったことが分かる。これは高座郡内で見ても同様であり、都心部における震災被害は焼失世帯の割合が多いことに対して農村部では倒壊・半壊世帯の割合が多くなることが分かる（表1）。

表１ 神奈川県の震災被害世帯
※『神奈川県震災誌』より

	被害世帯合計（戸）	被害世帯数割合				現世帯に対する被害世帯（%）	焼失世帯（%）
		全焼	全壊	半壊	破損		
横浜市	94.883	66.0	10.3	11.3	12.4	95.0	62.7
横須賀市	14.288	14.7	12.3	30.6	42.4	84.0	12.3
高座郡	17.501	ー	31.7	27.2	41.1	91.2	ー

2．寒川神社の震災被害

寒川神社の被害状況は「社務日誌」に詳細が記されている。

一 午後零時三十分頃 大地震起リ 神社本殿・拝殿・幣殿等皆傾斜、但シ本殿ノミハ土台ヨリ一尺位後方ニスベル、他ノ天水瓶・御輿殿・手水舎・一ノ鳥居等倒ル、其ノ他社務所破損、隋神門・二ノ鳥居傾斜ス

一 神社付近ノ人家全部傾倒覆ス、又ハ倒壊ス

神社本殿・幣殿・拝殿は傾斜し、本殿は土台の礎石から一尺ほど後方にズレてしまった。天水瓶・御輿殿・手水舎・一ノ鳥居は倒壊し、社務所は破損、隋神門と二ノ鳥居は傾斜した（図1）。神社周辺の人家は傾斜または倒壊しており、改めて震災被害の大きさを知ることができる。

震災発生から2日後の9月3日条では「伊豆ノ三原山附近トノコトニ付キ、今後ハ微動ハアルモ強震ハ無キ見込トノコトニテ、一般人ハ安心セシムベク二、三カ所ヘ貼札ヲナス」とあり、余震の心配はないと周辺に知らせているが、9月26日に再び強震が起こり「人心ヲシテ恟々ノ念ヲ新ナラシム」と余震に怯える人々の様子を窺うことができる。この時の余震により本殿はさらに「二尺」ほど移動し、とりわけ隋神門に関しては「神門傾斜甚シク、柱ハ土台ヨリ離脱シ、辛ウジテ倒壊ヲ免ルルノミナリ」と倒壊寸前の状態であったことがわかる（図2）。

図1　拝殿

図2　隋神門

3. 寒川神社復旧事業

震災により社殿は傾斜し、社務を司る社務所も被害を受けた。その為､3日に社務所を一時的に参集所に移し、4日に社務所内の整理、そして震災後から中断されていた日供祭は5日になってようやく再開された。神社祭祀の中でも欠かすことのできない祭典が中断せざるを得ないほど震災の影響は大きかったことが分かる。

被災した神社復旧に向けて9月12日に「神社改築願」を内務省に提出、翌10月3日に宮司が震災報告ならびに復旧工事の打ち合わせに出向、同月17日に被災箇所の調査のため、内務省技師が寒川神社を訪れている。その結果、大正14年2月には内務省直営工事として寒川神社復旧工事が着工され、同月年2月23日に仮殿遷座祭を斎行、昭和2年11月20日に本殿遷座祭が執り行われ、新たな流造りの社殿が竣工した（表2)。

表2　震災後の動き

大12.9.1	震災発生
3	傾斜した社務所から種々道具を参集所へ移動
5	日供祭再開
12	「神社改築願」を内務省へ
10.3	震災被害報告並びに復旧工事打合せの為、内務省へ
17	内務技師、震災被害実地調査の為、来社
大14.2.23	仮殿遷座祭
大15.8	「寒川神社復旧奉賛会」設立
昭2.11.20	本殿遷座祭

(1) 改められた社殿様式

寒川神社の復旧工事に際して、本殿の建築様式が大きく変更された。被災した本殿は明治28年5月に改築されもので、国幣中社としての社格を表現する様式として、伊勢神宮外宮にならい直線的な素木で構成された神明造りに改築された(図3)。しかし改築されたのは本殿のみで、幣殿・拝殿は流造りの建築様式であった為、神明造りの本殿では全体的な調和がとれず、様々な問題を残す結果となった。

復旧工事に伴い、本殿様式については「建築様式ヲ統一シテ崇高ナル神社ノ尊厳保持ヲ計リ度」と流造りと神明造りの2様式が混同したことへの深い反省に基づき、神社本来の伝統的な流造りに戻したいと要望するに至った（図4)。

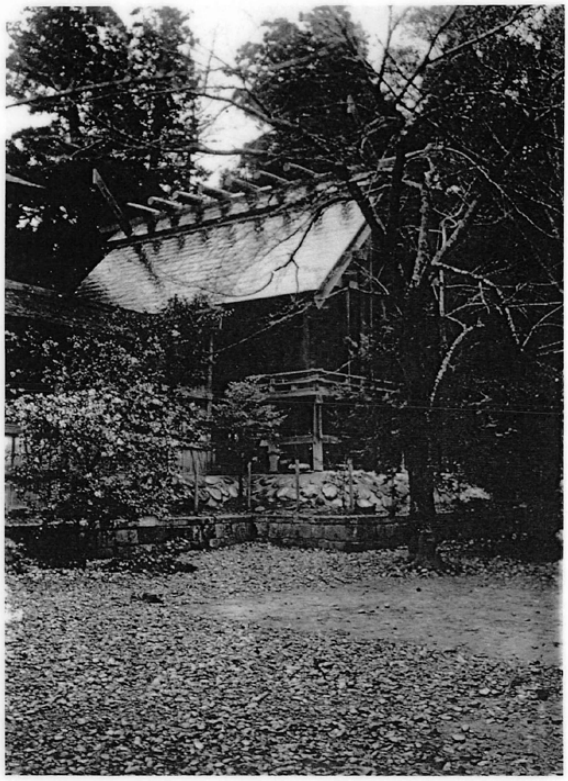

図3　神明造の本殿

図4　復旧後の本殿

(2) 復旧奉賛会の設立

寒川神社の復旧工事は内務省の直営工事として着工されたが、「国庫」による復旧は社殿に関するもののみであったため、社殿調度品や参拝者休憩所、境内地整備に関する費用は対象外であった。その為、大正15年8月、直営工事を側面援助する形で「寒川神社復旧奉賛会」を設立、町内・高座郡内（18町村）のみならず、関東一円に神職による募財活動がおこなわれ、神社の信仰圏の拡大にも繋がった。この活動により神社境内の整備や参拝者休憩所等が建てられ、新たな人々が神社に集うようになった（表3）。

4. 地域に残る震災碑

寒川町内では5基の震災碑が確認でき、そのほとんどが神社境内に建立されていることが分かる（表4）。

表4　寒川町の震災碑

地域	建立場所	内容
一之宮	八幡大神	被害の詳細及び再建の記録
倉見	倉見神社	被害の詳細を記載
宮山	寒川神社	倒れた鳥居を安置
田端	貴船大神	倒れた鳥居を碑として建立
宮山	北部公民館	震災復興に尽力した人物の功績を讃える

碑の系統は大きく分けて3種類に分類することができる。

・地域の被害状況を細かく記載
・倒れた建物及び建造物をモニュメント化
・震災にまつわる逸話

一之宮八幡大神と倉見神社に建立された碑には被害の詳細が記されており、被害の凄まじさを実感させられる。また注目すべきは、八幡大神の再建に関する記載である。碑の説明文には震災によりすべての建物が倒壊したが、同15年に本殿他すべてが再建されたと記されており、碑には再建に関わった、発起人22名・戦友会9名・支部青年団9名の名前が確認できる。一日でも早く神社を再建するために尽力した氏子崇敬者の姿から、地域を守る存在である氏神の重要さを窺い知ることができる（図5）。

一方で、震災で倒壊した建造物をそのまま震災碑として残している例も確認できる。寒川神社参道には、震災で倒壊した一ノ鳥居が安置されている。また田端に鎮座する貴船大神では、倒壊した鳥居の一部をモニュメント化し、震災碑として境内に建立している（図6）。

表3　復旧事業一覧

国費事業		復旧奉賛会事業	
大15.11.27	本殿改築竣工	昭2.11.17	社殿調度品
20	本殿遷座祭	昭3.4.30	参拝者休憩所
昭3.3.30	本殿周辺透塀	昭3.10.25	遷宮奉祝祭
9.19	参道（新設）	―	増補神社志刊行・頒布
10.15	社務所	―	旧社地買収
昭6.5.20	玉垣・神饌所・宝庫・末社宮山神社	篤志奉納	
11.30	神橋・荒垣(新設)	昭4.11.30	一ノ鳥居（相模鉄道）
昭7.3.20	二ノ鳥居・手水舎・	昭6.5.9	灯篭四基
	末社宮山神社鳥居	昭7.2.11	社号標

最後に町内において唯一神社以外に建立されている北部公民館の震災碑であるが、他の碑とは少し記載されている内容に違いがある。碑文には、震災で倒壊した家屋の復興に尽力した大工職の谷澤親子に対する感謝とその功績を讃えた内容が記されており、震災碑であると共に個人の功績を讃える「顕彰碑」としての側面も有していると思われる。

図5　八幡大神震災碑

図6　貴船大神震災碑

おわりに

本企画展開催に伴い、震災前後の神社変遷について当神社所蔵史料及び町内に残る震災関連の史料を再調査することができた。当神社に於いては明治28年に国幣中社として相応しい本殿様式を求めた結果、従来の流造りとは違う神明造りの本殿が竣工した。未曽有の震災に見舞われ倒壊の危機に瀕した本殿は、内務省直営工事により再び新たな本殿へと生まれ変わるのであるが、調和がとれていなかった社殿様式を改め、「崇高ナル神社ノ尊厳保持」とあるように国幣中社として本来の流造りの姿を求めたという点はとても興味深いものであった。

また関東大震災から100年が経ち、震災の記憶が風化しその存在すら忘れ去られつつある。地震大国である日本において、震災碑などの自然災害伝承碑は重要な文化財であると共に、地域の防災意識を高める役割を持っていることは言うまでもない。現在、当神社に安置されている倒壊した鳥居をそのままの形にしておくのではなく、新規案内板の設置や周辺環境の整備を実施し、より有効な活用方法を検討中である。

最後に、本企画展を実施するにあたり「神奈川県震災100年プロジェクト」に参加させていただいた。これまで宗教法人が運営する博物館施設として、些か閉鎖的な環境下で運営を続けてきたが、本プロジェクトに参加することで他館との連携した企画運営をおこなうことができ、これまで足を運ばれなかった方々にも、神社における博物館活動の知っていただく良い機会になった。プロジェクト委員の皆様、また県博協事務局の皆様に感謝申し上げる。

〈参考文献〉

神奈川県『神奈川県震災誌 復刻版』 1927
寒川神社『寒川神社誌』 2013
寒川町『寒川町史5資料編』1994
寒川町『寒川町史7通史編　近・現代』2000
寒川町『寒川町史9神社編』1994
寒川町町史編纂委員会『寒川町史調査報告9　近現代の石造物』1999
寒川町町史編纂委員会「史料紹介　関東大震災の記録」『寒川町史研究』第17号　2004
武村雅之「神奈川県茅ケ崎市・寒川町での関東大震災の跡」−相模川東岸地域の被害と復興−　『歴史地震』第28号　2013